



病害虫発生予察情報予報第 6 号


佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
水稲 (山間早植え)	紋枯病	やや多	多	151~152	 斑点米カメムシ
	トビイロウンカ	多	多	159~161	
	斑点米カメムシ類	多	多	169~170 187~190	
水稲 (普通期)	トビイロウンカ	多	多	159~161	 トビイロウンカ
	穂いもち	並	並	144~149	
	紋枯病	多	多	151~153	
	白葉枯病	並	並	150~151	
	コブノメイガ	並	やや多	166~167	
	斑点米カメムシ類	多	多	169~170 187~190	
<p>1. トビイロウンカ 本年、本虫の発生が多い。各圃場での発生状況を確認し、防除適期である幼虫ふ化揃い期に防除を実施する。(平成 29 年 8 月 30 日注意報第 3 号参照)</p> <p>2. いもち病 一部ほ場で病斑が上位葉にみられる。葉いもちの発生がみられる中晩生品種(さがびよりやもち品種)ほ場では、穂ばらみ期~出穂期の防除を徹底する。発生が多いと予想される場合には穂揃い期にも防除を行う。</p> <p>3. 紋枯病 平年に比べ、発生株率が高く、また一部ほ場で上位葉の葉鞘に発生がみられる。各圃場での発生状況を確認し、病斑が上位 3 葉の葉鞘まで達している場合には直ちに防除を行う。</p>					
大豆	ハスモンヨトウ	多	並	204~206 210~212	 ハスモンヨトウ
	カメムシ類	多	並	205~206 212~213	
	紫斑病	並	並	199~200	
<p>1. ハスモンヨトウ 一部の圃場で白変葉(若齢幼虫の集団による被害)の発生が認められる。各圃場での発生状況を確認し、白変葉が増加し始めた時期に確実に防除を行い、防除後も新たな白変葉の発生を確認したら、追加防除を実施する。</p>					
普通作全般	<p>1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺的环境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期や散布時間等を予め伝達するなどの対応を取る。</p>				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)	
		平年比	前年比			
イチゴ(育苗圃)	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	多	多	208~212		
	ハダニ類	多	やや多	214~215		
	うどんこ病	並	並	204~206		
	アブラムシ類	多	多	219~220		
	1. 炭疽病、疫病、萎黄病 一部のパールの苗で炭疽病による汚斑型病斑がみられる。これら立枯性病害の発病株は早急に圃場外に持ち出し適切に処分し、周辺の苗への伝染を抑えるとともに、薬剤防除を実施する(平成29年7月28日付け病虫害発生予察注意報第1号参照)。 また、定植においては感染、発病のない苗を利用する。					炭疽病による葉の汚斑型病斑
2. ハダニ類 苗による本圃への本虫の持ち込みを防ぐため、定植前の防除を徹底する。防除には薬剤抵抗性の発達が少ないとされる気門封鎖系薬剤を活用し、発生が見られたら5日間隔で複数回連続散布する。						
3. うどんこ病 本圃での本病の発生を抑制するため、定植前の防除を徹底する。						
アスパラガス	茎枯病	並	並	318		
	褐斑病	やや多	やや少	319~320		
	斑点病	やや少	やや少	319		
	アザミウマ類	多	多	322		
	ハダニ類	多	多	322~323		
1. アザミウマ類 虫見板(約20×30cm)への払い落とし(擬葉部を2~3回叩く)を行い、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は直ちに薬剤防除を行う。 また、薬剤が十分かかるように茎葉を整理して通風をよくする。						
2. ハダニ類 アザミウマ類と同様に虫見板に払い落としを行い、寄生が認められれば直ちに薬剤防除を行う。多発生では防除が困難となるので、発生初期での防除を徹底する。						
2. 褐斑病 降雨時以外は施設開口部を開放し通風を図るとともに、3週間間隔を目安とし発生前から薬剤防除を実施する(前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は間隔を短縮)。						
野菜・花き 共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ) (オオタバコガ)	多	多	168, 170 イチゴ: 217~219 アスパラガス: 252~253 アスパラガス: 321, 324 イチゴ: 398		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
カンキツ	かいよう病	並	並	222~224	 カンキツ黒点病
	黒点病	やや少	少	220~222	
	ミカンハダニ	やや多	多	242~244	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	236~242	
<p>1. 果実腐敗対策 日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので収穫時に取り除き処分する。また、果実には傷をつけないよう丁寧に扱う。腐敗防止対策の薬剤散布は収穫7~10日前に、霧状になるノズルを使ってムラがないように散布する。</p> <p>2. 黒点病 秋雨は発病を助長するので防除を徹底する。また、枯れ枝は伝染源となるので、除去し処分する。</p> <p>3. ハナアザミウマ類 高温乾燥が続くと多発することがあるため、果実の着色始期以降、園内をよく観察し、果実での被害を確認したら、早急に薬剤を散布する。</p> <p>4. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。</p>					
ナシ	黒星病	並	並	287~290	
	ナシヒメシンクイ	並	並	301~304	
	ハダニ	やや多	多	306~309	
ブドウ	べと病	やや少	並	337~339	 ブドウべと病
	褐斑病	やや少	並	339~340	
<p>1. べと病 本病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のために、収穫終了後の防除を徹底する。</p>					
果樹全般	果樹カメムシ類	多	多	カンキツ：248~251 ナシ：304~305 ブドウ：351	 チャバネアオカメムシ
		注意報第2号			
<p>1. 果樹カメムシ類 小城市及び佐賀市に設置した予察灯において、誘殺数が多くなっており、一部園地で飛来が認められている。発生量や飛来時期は地域によって異なるため、各園地の飛来状況の把握に努め、飛来が認められた場合には、直ちに防除を実施する。 なお、今後、発生が多いまま推移し、飛来が長期にわたることも考えられる。飛来状況によっては、前回から10~15日程度を目途に防除を行う。ただし、ネオニコチノイド系薬剤は、50mm程度の降雨で効果が期待できなくなるため、散布後に同雨量以上の降水があった場合は、再散布が必要である。</p> <p>2. 夜蛾類 夜温が高いと夜蛾類の活動が活発になるため、果実の被害に注意する。園地周辺のカミエビ、アケビ、ムベ等は夜蛾類幼虫の食草となるので除去する。また、忌避灯を設置している園では、点灯時間は日の出・日没の時刻に合わせて調整する。</p>					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	炭疽病	やや少	並	410~411	 チャノココクモンハマキ(食害)
	輪斑病	並	やや多	411	
	カンザワハダニ	多	多	415~416	
	クワシロカイガラムシ	多	多	422~423	
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	多	420~421	
	チャノキイロアザミウマ	多	多	421~422	
	チャノココクモンハマキ	多	多	418~420	
	チャノホソガ	並	多	417~418	
<p>1. カンザワハダニ 一部で発生が認められる。越冬量を低減するため、よく観察し低密度時に防除を行う。</p> <p>2. クワシロカイガラムシ 防除適期にあたる第三世代幼虫ふ化最盛期は9月中~下旬頃である。園内のふ化状況を確認し、適期に防除を行う。第三世代は幼虫ふ化期がばらつくため、多発生園では7~14日間隔で防除を二回行う。</p> <p>3. ゴマフボクトウ 周辺樹木でふ化した幼虫が風で茶園に達し、秋芽の葉腋から侵入するので、園内の発生状況をよく観察し、発生初期に他のチョウ目害虫と同時防除を行う。</p> <p>4. チャトゲコナジラミ 発生地域が拡大している。園内の発生状況をよく観察し、成虫が見られなくなった頃(若齢幼虫発生期)に薬剤防除を行う。</p>					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
 なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
 6 ページ目以降：巡回調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

9月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する9月の気象条件については、福岡管区気象台発表の3ヶ月予報（平成 29 年 8 月 25 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3ヶ月予報における9月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	30 (24.2℃)	50	高
降水量	30	40 (179.5 mm)	30	並

Ⅲ. 9月の予報

水稻（山間早植え）

巡回調査（16 圃場）
調査日：8月23日



1. 紋枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率0.8%（平年1.6%、前年0%）
平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）
 - (2) 9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
各圃場での発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合には直ちに防除を行う。

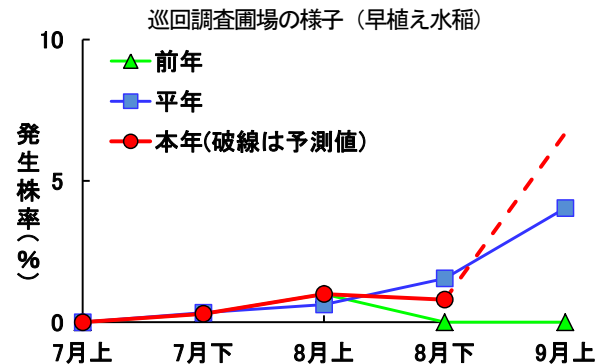


図1 山間早植え水稻での紋枯病の発生推移

2. トビイロウンカ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率2.8%（平年3.7%、前年0.5%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - (2) 9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 圃場における発生状況を確認し、幼虫ふ化揃い期（防除適期）に防除を実施する。
 - (2) 本虫は株元に生息しているため、薬剤は株元にむらなくかかるように、十分量を丁寧に散布する。

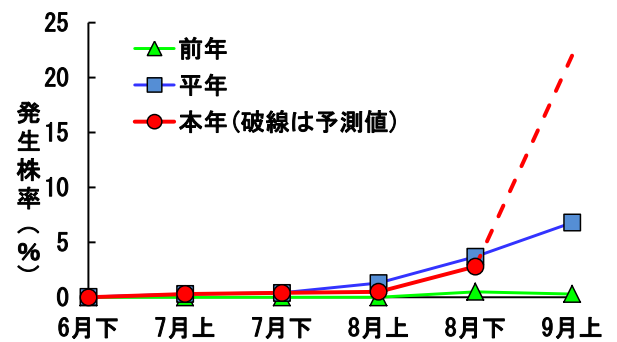


図1 山間早植え水稻でのトビイロウンカの発生推移

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アサジカスミ

カメ、ミナミアオカメムシ等）

水稻（普通期）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（普通期水稻）

巡回調査（48 圃場）
調査日：8月23～25日



巡回調査圃場の様子（普通期水稻）

1. トビイロウンカ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①巡回調査(図1参照)

発生株率 10.4% (平年 3.5%、前年 0.1%)

平年比: 多<+> 前年比: 多<+>

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 注意報第3号及び特記事項を参照。

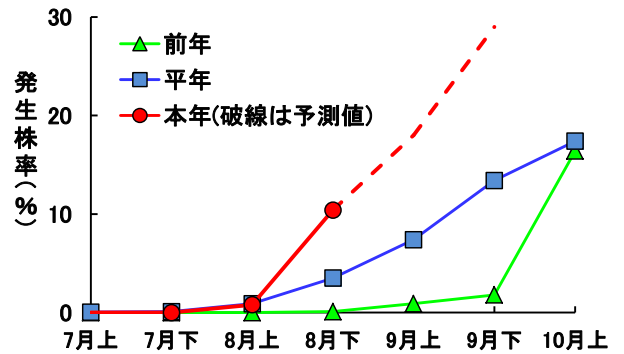


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①巡回調査(図1参照)【葉いもち】

発生株率 9.1% (平年 13.0%、前年 20.7%)

平年比: 並<±> 前年比: やや少<-~±>

(2) 9月の気象予報

並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 進展型病斑がみられる圃場では早急に防除を行う。

(2) その他は、特記事項を参照する。

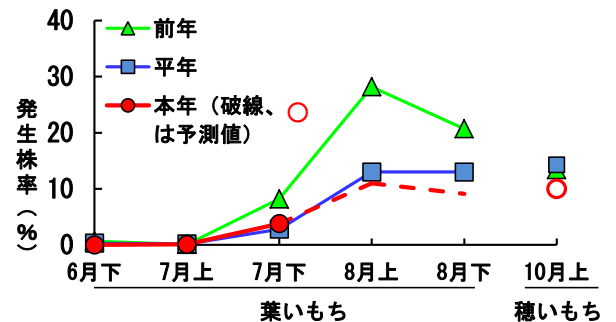


図1 普通期水稻でのいもち病の発生推移

3. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①巡回調査(図1参照)

発生株率 7.1% (平年 2.5%、前年 1.1%)

平年比: 多<+> 前年比: 多<+>

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

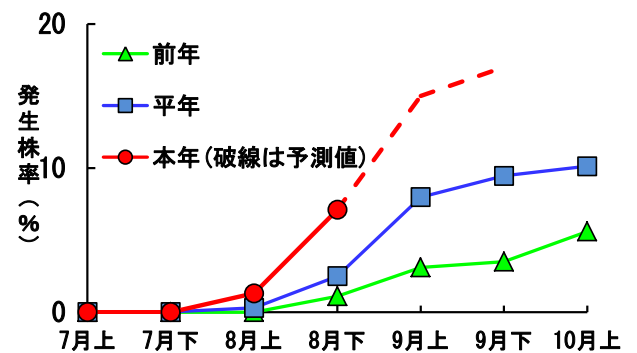


図1 普通期水稻での紋枯病の発生推移

4. 白葉枯病

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の内容

(1) 発生の実況

①巡回調査

発生株率 0% (平年 0.0%、前年 0%)

平年比: 並<±> 前年比: 並<±>

(2) 9月の気象予報

並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 台風等の強風雨後に多発生しやすいので注意する。
- (2) 本病の発生圃場では、露が水稻に付着している時間帯は圃場へ入らない。

5. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

被害株率 1.8%（平年 15.1%、前年 6.3%）

平年比：少（-） 前年比：やや並（-〜±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、圃場における発生状況を確認し、発蛾最盛期の7日後（幼虫ふ化揃い期）に防除を実施する。

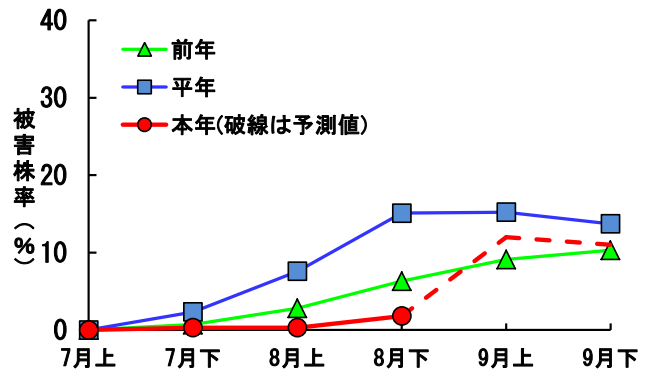


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移

6. 斑点米カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 水田隣接のイネ科植物での捕虫網によるすくい取り調査（8月20〜25日）

発生量は平年及び前年並（表1）（±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い、防除要否を判断する。穂揃い期〜乳熟期に、ほ場内の20回すくい取りで5頭以上認めた場合は防除を実施する。

(2) 多発生時は穂揃い期とその7〜10日後に防除を行う。少発生の場合は乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に防除を行う。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(2017年8月20〜25日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホリハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アサジカメムシ		ミナミアカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	
佐賀市①	道端	イノコク*サ類	6	17	2	0	10	16	0	0	0
佐賀市②	空き地	イノコク*サ類	13	4	0	1	0	0	0	0	0
唐津市	道端	イノコク*サ類	11	2	1	0	0	5	5	0	0
伊万里市	道端	イノコク*サ類	0	0	1	0	0	0	1	0	0
小城市	道端	イノコク*サ類	0	0	2	3	0	1	0	0	0
鹿島市	道端	イノコク*サ類	0	0	2	0	0	0	6	6	0
嬉野市①	空き地	イノコク*サ類	1	0	1	0	0	1	4	2	0
嬉野市②	道端	イノコク*サ類	1	0	8	4	0	0	2	0	0
みやき町	道端	イノコク*サ類	0	2	4	4	1	2	0	0	0
吉野ヶ里町	道端	イノコク*サ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
有田町	空き地	イノコク*サ類	6	0	1	0	0	0	0	0	0
白石町	空き地	イノコク*サ類	0	3	0	0	0	0	2	0	0
本年(平均)			3.2	2.3	1.8	1.0	0.9	2.1	1.7	0.7	0.0
前年(平均)			2.5	3.6	4.3	1.2	1.0	2.3	1.8	0.3	0.0
平年(過去10年の平均)			2.1	5.4	2.2	0.8	0.6	0.7	13.6	4.4	0.0

大豆

巡回調査 (22 圃場)
調査日：8月23～25日



巡回調査圃場の様子 (大豆)

1. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率 3.3% (平年 1.5%、前年 1.9%)

平年比：多く(+) 前年比：やや多(±~+)

白変葉発生株率 0.6% (平年 1.0%、前年 1.4%)

平年比：並(±) 前年比：やや少(-~±)

②フェロモントラップ (図2 参照)【県内9地点】

平年比：やや少(-~±)

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

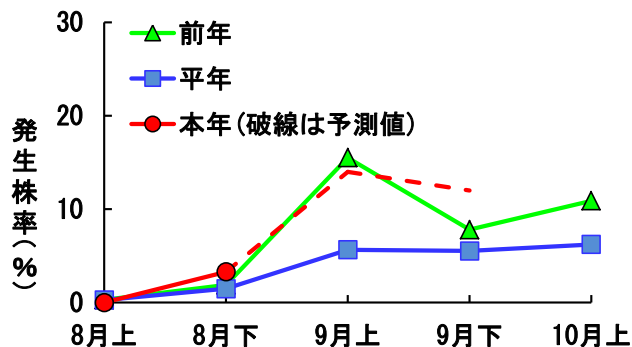


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

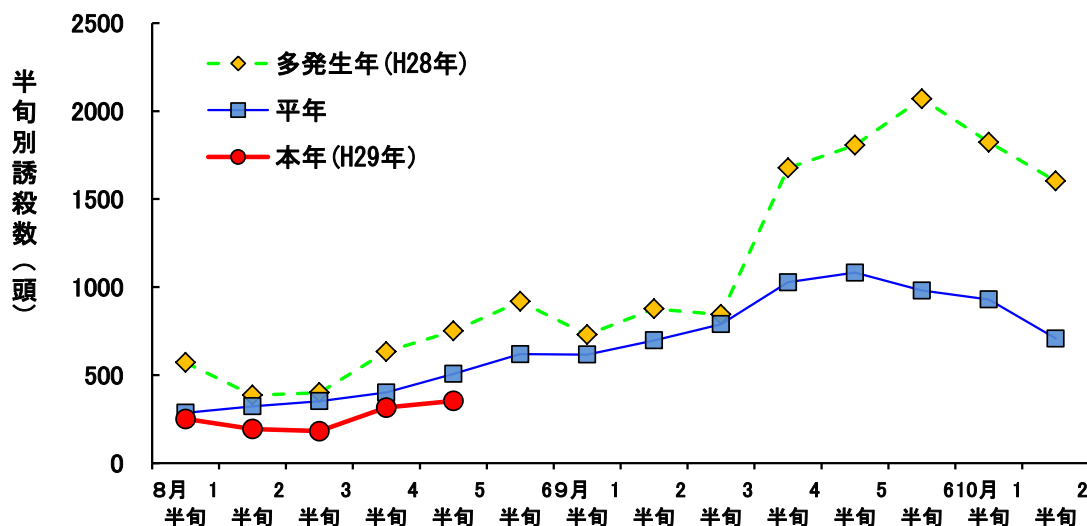


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数 (10月2半旬まで) (農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。)

2. カメムシ類 (アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率 0% (平年 0.0%、前年 0.0%)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

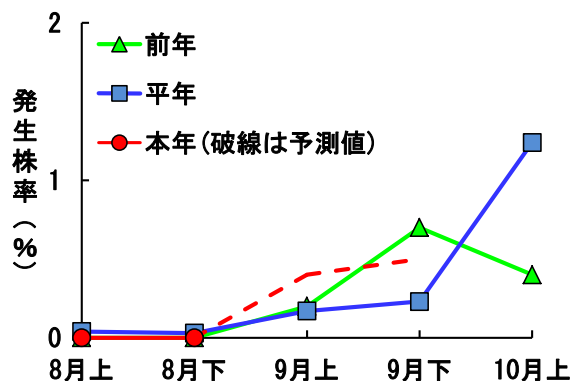


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の防除は、莢の伸長初期～子実肥大中期（9月中旬頃まで）が効果的である。発生が多い場合には、7～10日間隔で2～3回防除を行う。

(2) 防除に当たっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

3. 紫斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 9月の気象予報

並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

若莢期～子実肥大中期に防除を実施する。

イチゴ（育苗圃）

（巡回調査 11 圃場、苗を調査
調査日：8月23日～24日）



巡回調査圃場の様子

1. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 子苗での発生の現況

①巡回調査（図1参照）

立枯症の発生株率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

炭疽病の汚斑型病斑の発生株率：1.6%

（平年0.3%、前年0%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

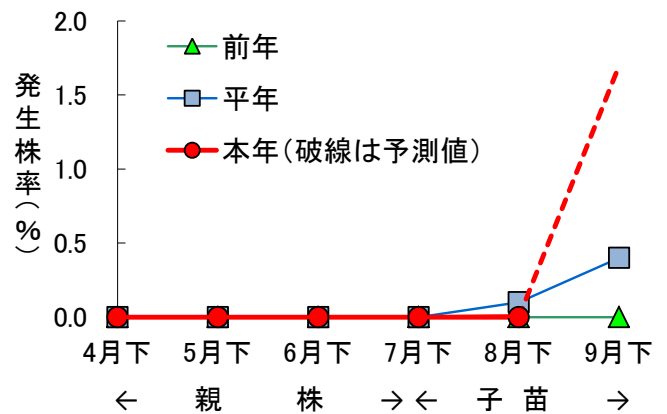


図1 イチゴ炭疽病・疫病の発生推移

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：10.8%（平年10.8%、前年14.9%）

平年比：並〈±〉 前年比：やや少〈-〜±〉

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

(2) その他については特記事項を参照。

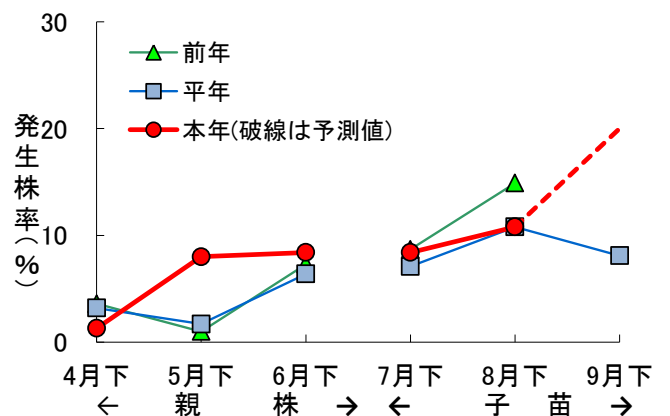


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

3. うどんこ病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：0%（平年5.4%、前年0%）
平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）
 - (2) 9月の気象予報
並発生の条件（±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。
 - (2) その他については特記事項を参照。

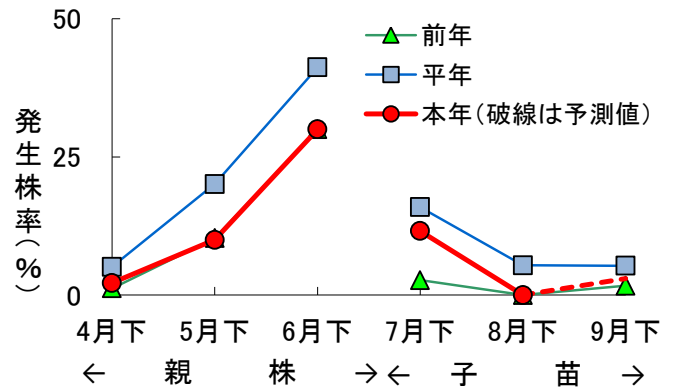


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

4. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：9.2%（平年3.0%、前年3.6%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、定植前に除草を徹底する。

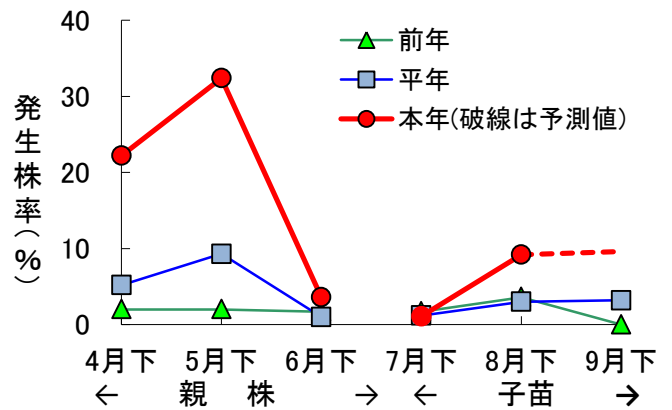


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

巡回調査（8圃場）
調査日：8月23日～24日



巡回調査圃場の様子

1. 褐斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：14.4%（平年8.0%、前年23.1%）
平年比：やや多（±〜+）
前年比：やや少（-〜±）
 - (2) 9月の気象予報
並発生の条件（±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

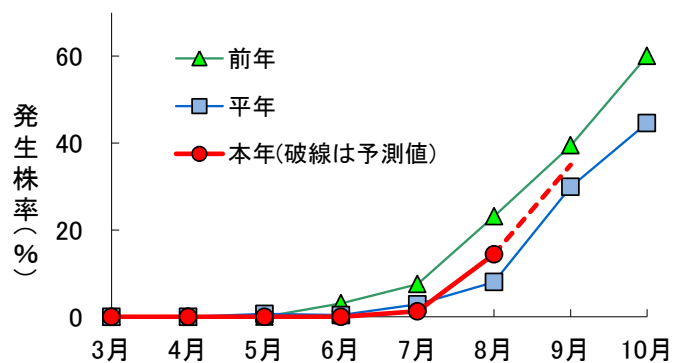


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

2. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：31.9%（平年23.3%、前年18.1%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：多（+）
 - (2)9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)特記事項を参照。

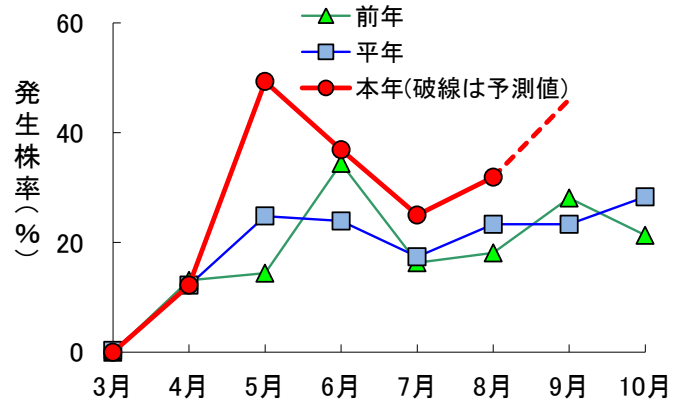


図1 アザミウマ類のアスパラガスでの発生推移

3. ハダニ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：23.8%（平年2.5%、前年1.3%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
 - (2)9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)特記事項を参照。

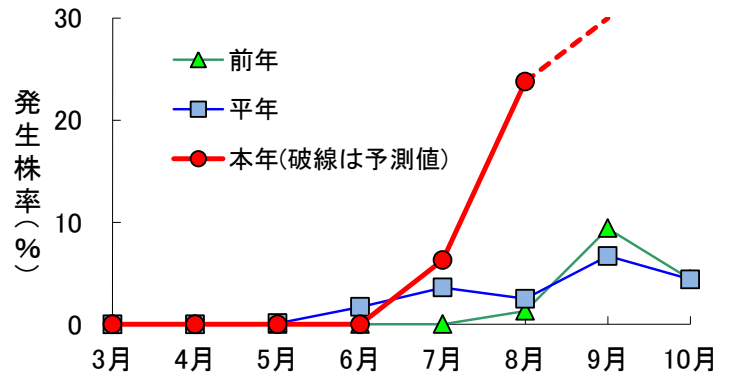


図1 ハダニ類のアスパラガスでの発生推移

野菜・花き共通

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、材バコガ）

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
イチゴにおける食害株率：0%（平年0.3%、前年0%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
アスパラガスにおける食害株率：0%（平年0.3%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ②フェロモントラップによるハスモンヨトウ及びオオタバコガの8月の誘殺数は、平年並で推移している（図3～4）。（±～+）
 - (2)9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)圃場毎の発生状況を確認し、本虫の若齢期に防除する。また、苗については定植前の防除を徹底する。

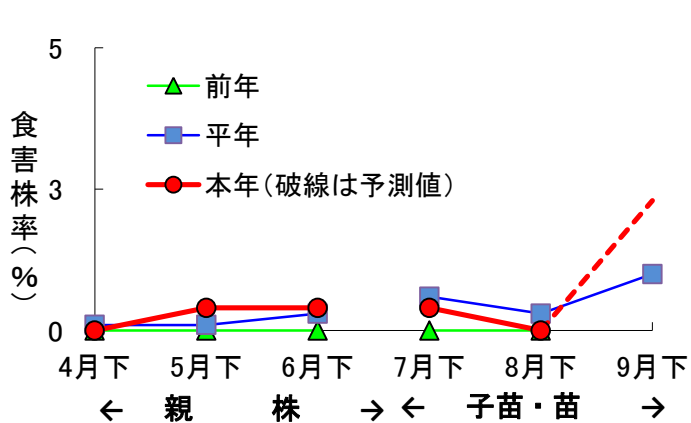


図1 イチゴ苗でのチョウ目害虫による食害株率

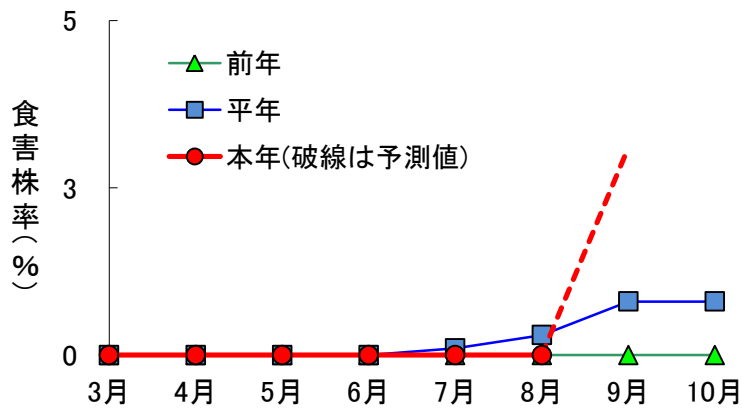


図2 チョウ目害虫のアスパラガスでの被害株率

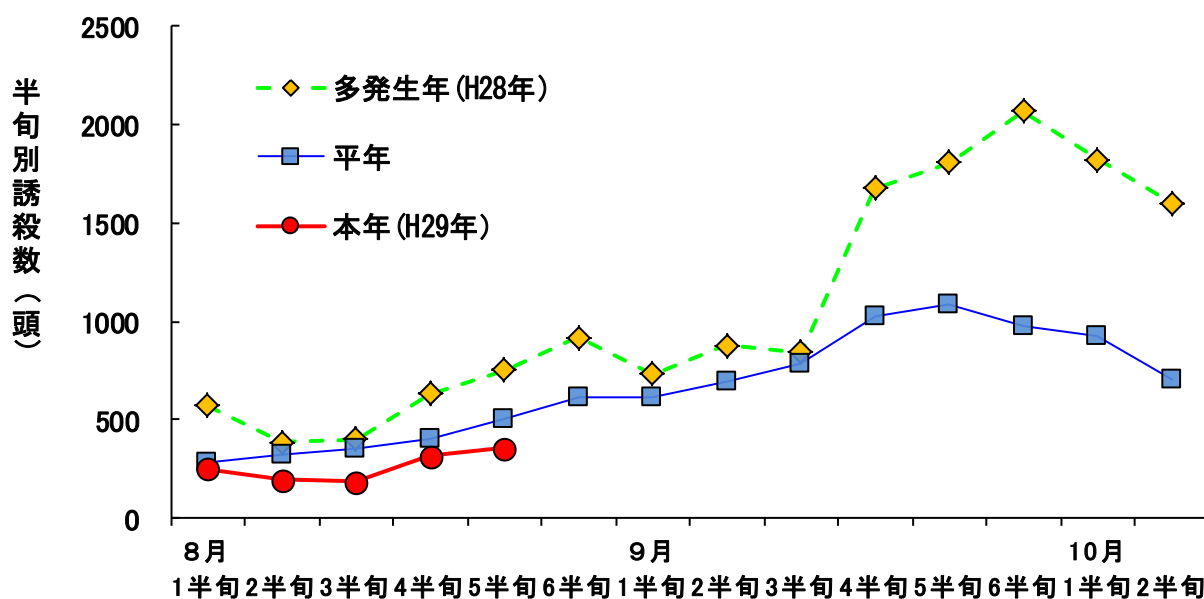


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。)

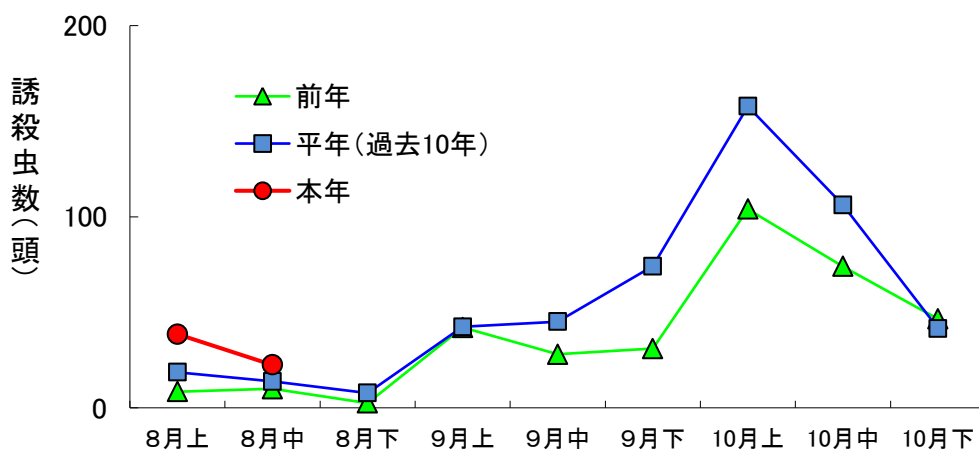


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数)

カンキツ

巡回調査 (8 圃場)
調査日 : 8 月 18 日~22 日



巡回調査圃場の様子

1. かいよう病

1) 予報の内容
発生量 : 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図 1、2 参照)

発生葉率 : 0% (平年 0.2%、前年 0%)
平年比 : やや少 (一~±) 前年比 : 並 (±)
発生果率 : 0% (平年 0.1%、前年 0%)
平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)

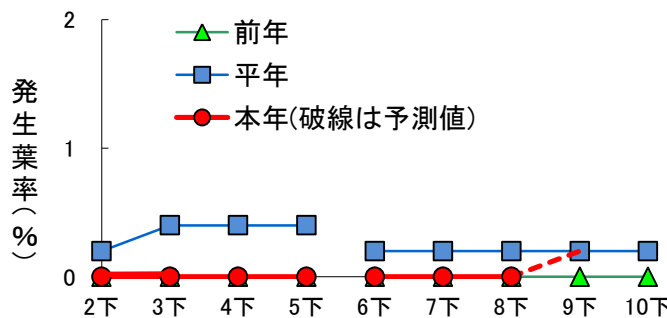


図 1 カンキツかいよう病 (葉) の発生推移
(注 : 5 月下旬までは旧葉、6 月以降は新葉を調査)

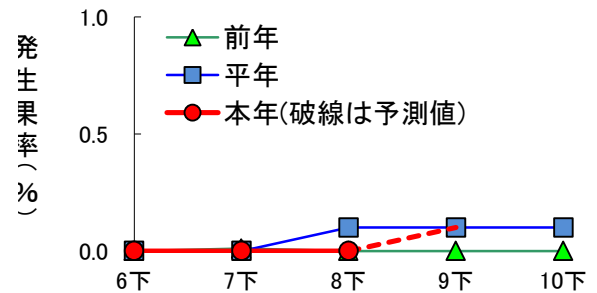


図 2 カンキツかいよう病 (果実) の発生推移

(2) 9 月の気象予報
並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種 (ネーブル、はるみ等) の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園、着果数が少ない園等) では、無機銅水和剤 (クレフノン 200 倍加用) で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20~25 日とする。
- (2) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので混用を控える。
- (3) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。
- (4) ミカンハモグリガ幼虫の食害により発病が助長されるので、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園、着果数が少ない園等) ではハモグリガ防除を併せて実施する。
- (5) 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来 7 日前~前日までに必ず防除を行う。

2. 黒点病

1) 予報の内容
発生量 : 平年よりやや少ない (前年より少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図 1 参照)

発生果率 : 3.4% (平年 13.7%、前年 38.0%)
平年比 : やや少 (一~±) 前年比 : 少 (一)

(2) 9 月の気象予報
並発生の条件 (±)

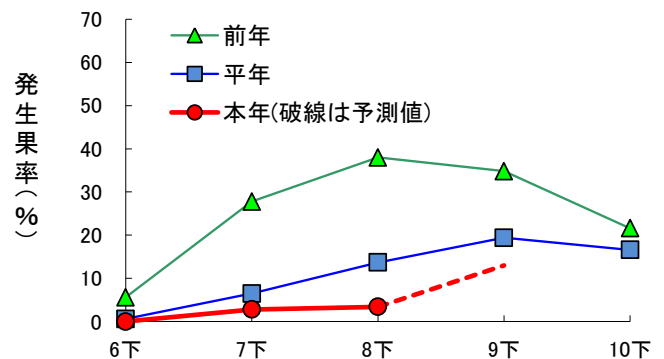


図 1 カンキツ黒点病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200~250mmに達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の散布を行う。
- (2) せとかは黒点病に非常に弱いので、露地栽培では積算降雨量150mmを次回散布の目安とする。
- (3) 防風樹の剪定等を行い、通風をよくする。
- (4) その他については、特記事項を参照する。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：0.6%（平年8.2%、前年16.3%）

平年比：やや少（-~±） 前年比：少（-）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5~1頭）からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

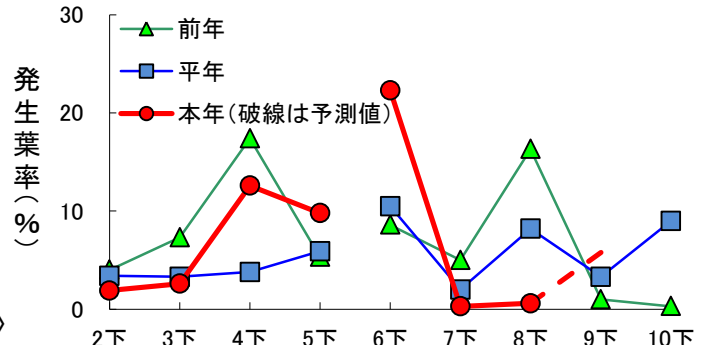


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
(注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査)

ナシ

巡回調査（6圃場）

調査日：8月18日

1. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①フェロモントラップ（図1参照）

平年比：やや少（-~±） 前年比：やや多（±~+）



巡回調査圃場の様子

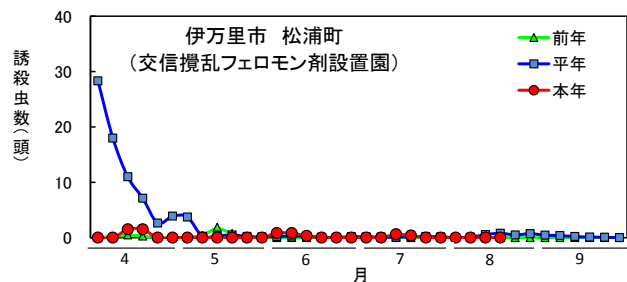
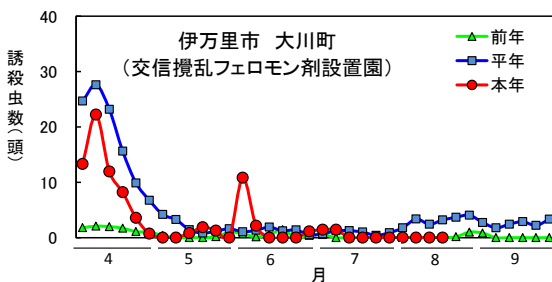
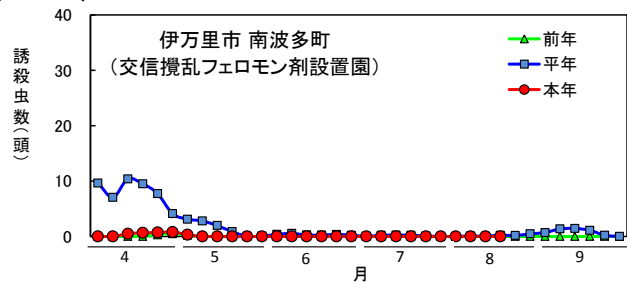
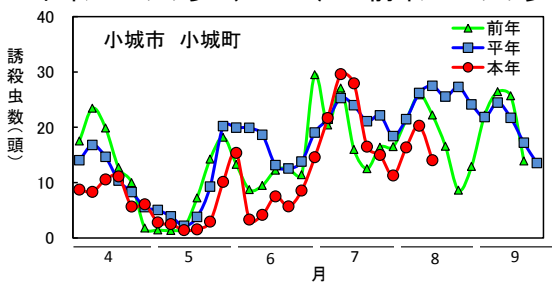


図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

②サクラに設置したフェロモントラップ（表1参照）

サクラに設置しているフェロモントラップ（伊万里市3ヶ所）での、8月第1半旬～第4半旬までの誘殺数は前年より少ない（－）。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシキイの誘殺数（頭）
（西松浦農業改良普及センター調査）※8月1～4半旬の合計値

地点名	H26年	H27年	H28年	H29年
伊万里市 南波多町	1	1	0	0
伊万里市 大川町	20	14	52	8
伊万里市 新天町	57	37	36	40
計	78	52	88	48

(2)9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。
- (2) 使用する薬剤の選定（収穫前使用日数や汚れ）に注意し、収穫まで7～10日間隔で薬剤散布を行う。
- (3) 交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10～14日間隔で薬剤防除を行う。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：1.7%（平年7.8%、前年26.5%）

平年比：やや少（－～±） 前年比：少（－）

(2)9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) ハダニ類は高温乾燥で急増するので、低密度時（発生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数0.5頭以下）に防除を行う。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。

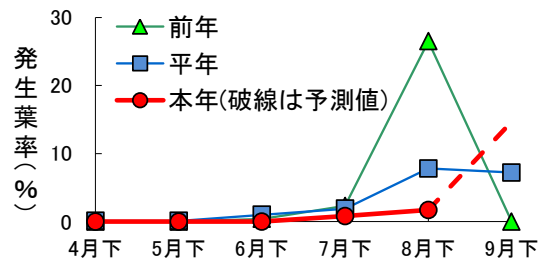


図1 ハダニ類のナシでの発生推移

ブドウ

巡回調査（6圃場）

調査日：8月18日～22日

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年6.7%、前年1.7%）

平年比：やや少（－～±） 前年比：並（±）



巡回調査圃場の様子

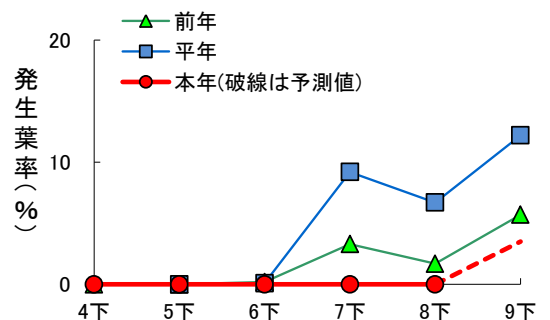


図1 ブドウべと病の発生推移

(2)9月の気象予報
 並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)降雨により発病が進展するので、降雨前の予防散布を徹底する。
- (2)ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）については、耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。
- (3)その他については、特記事項を参照する。

果樹全般

1. カメムシ類（本文掲載）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①予察灯（図1参照）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

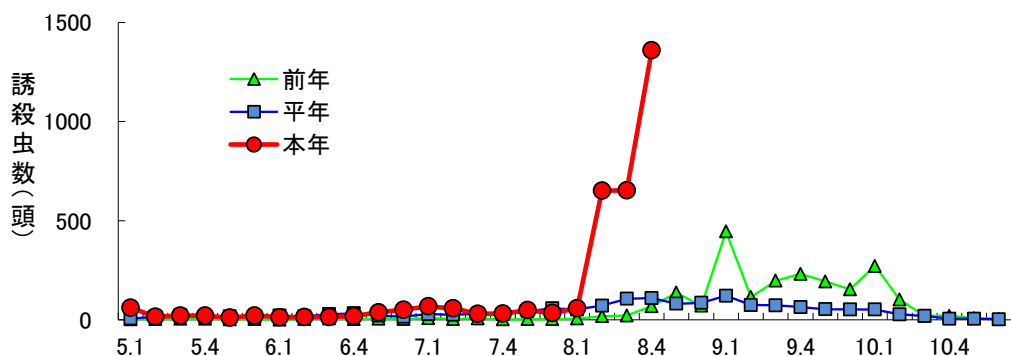


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②ヒノキ毬果における寄生数（図2、表1参照）

成幼虫数平均：24.4頭（平年12.4頭、前年8.7頭） 平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

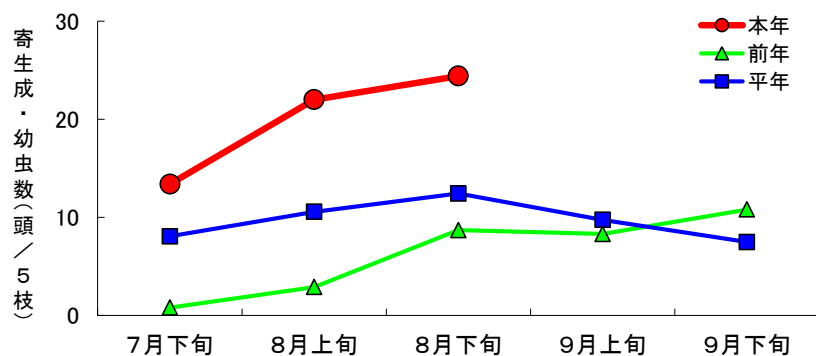


図2 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移

③ヒノキ毬果における口針鞘数 (図3、表1参照)

口針鞘数平均 : 15.6 本/果 (平年 12.0 本、前年 5.5 本) 平年比 : やや多 (±~+) 前年比 : 多 (>+)

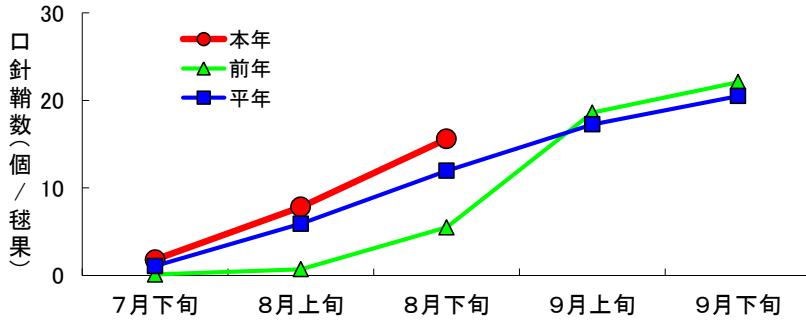


図3 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針鞘数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生虫数及び口針鞘数

No.	調査地	ヒノキ毬果における寄生状況 1)					口針鞘数調査 2) (寄生状況調査時にサンプル採取)			ヒノキ毬果 3) 着果程度
		7月下旬 (7/19~ 24) 合計	8月上旬 (8/1~3) 合計	8月下旬(8/18~22)			7月 下旬	8月 下旬	8月 下旬	
				成虫	幼虫	合計				
1	上峰町	20	8	7	2	9	3.7	16.5	20.7	やや少
2	神埼市	8	13	4	2	6	0.4	5.1	26.1	やや多
3	小城市	32	26	2	2	4	2.9	14.1	14.8	やや多
4	多久市	6	3	13	2	15	2.3	1.3	12.4	やや多
5	唐津市 1	17	11	9	15	24	2.1	3.6	13.8	多
6	唐津市 2	15	25	29	12	41	0.5	1.7	6.5	多
7	伊万里市 1	6	33	13	11	24	0.0	3.8	7.5	中
8	伊万里市 2	5	21	23	18	41	0.8	6.5	20.6	やや多
9	伊万里市 3	18	7	26	3	29	0.6	4.6	8.6	中
10	白石町	13	16	75	1	76	0.8	4.1	9.7	多
11	鹿島市 1	9	13	5	9	14	0.0	3.3	14.7	やや多
12	鹿島市 2	8	124	37	16	53	0.1	4.7	16.7	やや多
13	鹿島市 3	18	12	9	3	12	4.8	21.6	25.3	中
14	太良町 1	16	11	6	1	7	2.5	22.6	28.3	中
15	太良町 2	10	7	6	5	11	1.7	3.1	8.1	中
	平均	13.4	22.0	17.6	6.8	24.4	1.5	7.8	15.6	0.0
	平年	8.1	10.6	-	-	12.4	1.1	6.1		
	前年(H28年)	0.8	2.9	3.6	5.1	8.7	0.1	0.7		0.0

1)たき落としによる調査

2)口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

3)ヒノキ毬果着果程度:福岡総農試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少:ほとんど結実が見あたらない
- ・少:梢頭部にわずかに結実
- ・やや少:梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中:梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多:梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 合成ピレスロイド系薬剤やネオニコチノイド系薬剤を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖(リサージェンス) 生じる場合があるので、これら害虫の発生に注意する。

(2) 県内各調査地点における誘殺状況の推移については、佐賀県農業技術防除センターHPの「病害虫データ情報」を参照する。

(3) その他については、特記事項を参照する。

茶

巡回調査 (7 圃場)

調査日: 8月18日~22日



巡回調査圃場の様子 (茶)

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況 (図1参照)

① 発生葉数: 2.0枚/m² (平年6.1枚、前年1.9枚)

平年比: やや少く(〜±) 前年比: 並(±)

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並であり、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生圃場では、秋芽の充実と翌年の菌密度を抑えるため、秋芽生育期 (萌芽期~三葉期) の防除を徹底する。

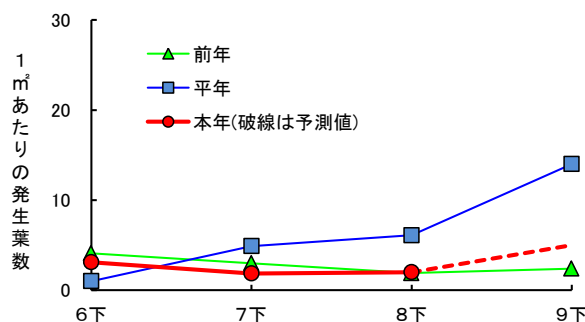


図1 炭疽病の発生葉数の推移

2. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

発生葉率 2.0% (平年 2.3%、前年 3.6%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

(2) 9月の気象予報

平年に比べ、気温が高く降水量は並と予想され、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

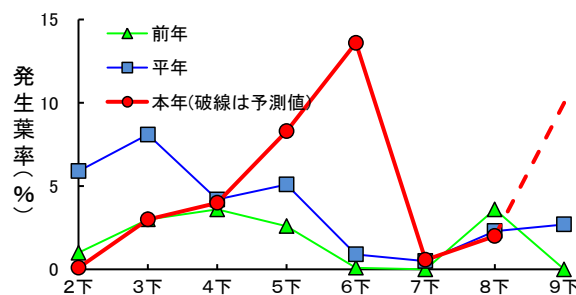


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

3. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況 (図1参照)

発生株率: 23.6% (平年21.3%、前年21.4%)

平年比: 並(+) 前年比: 並(±)

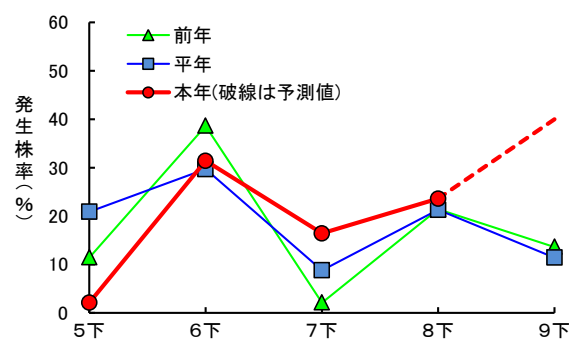


図1 クワシロカイガラムシの茶での発生推移

(2) 9月の気象予報

平年に比べ、気温が高く降水量は並と予想され、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

虫数：3.7頭/4ヶ所（平年2.9頭、前年7.0頭）
 平年比：並〈±〉 前年比：やや少〈-〜±〉

(2) 9月の気象予報

平年に比べ、気温が高く降水量は並と予想され、多発生の条件〈+〉

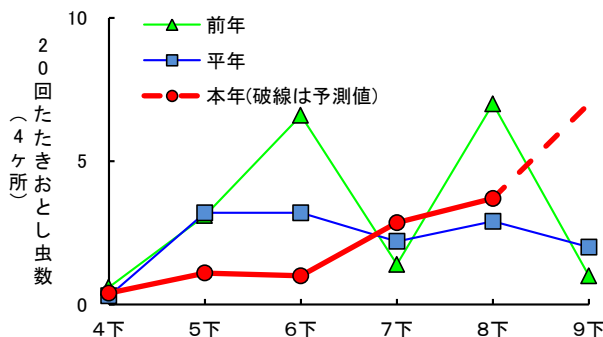


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1、2参照）

①虫数：43.1頭/4ヶ所（平年32.2頭、前年73.6頭）
 平年比：並〈±〉 前年比：やや少〈-〜±〉

②吸引粘着トラップ

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

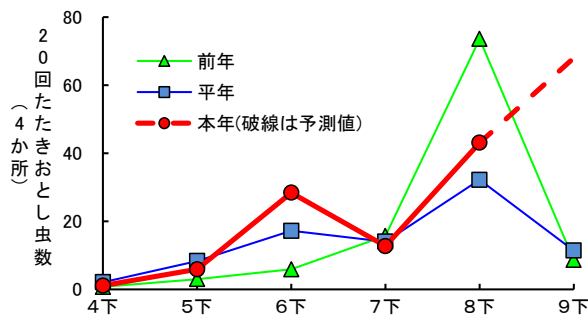


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

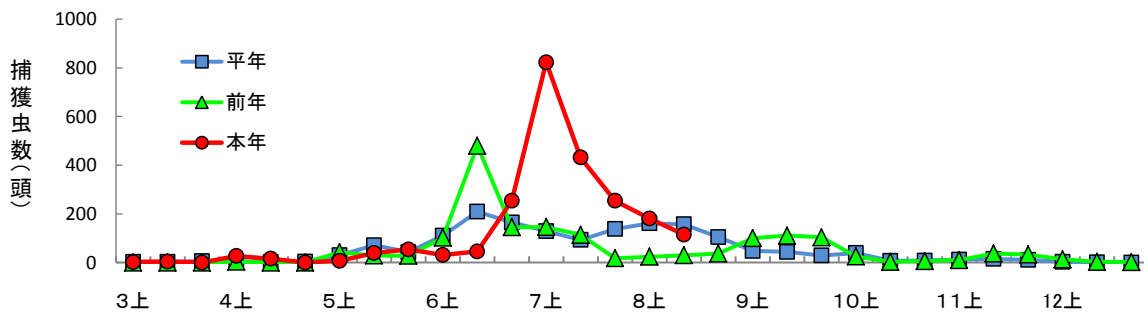


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移
 （嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 9月の気象予報

平年に比べ、気温が高く降水量は並と予想され、多発生の条件〈+〉

6. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1、2参照）

①被害葉数：0.4枚/m²（平年4.2枚、前年0枚）
 平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

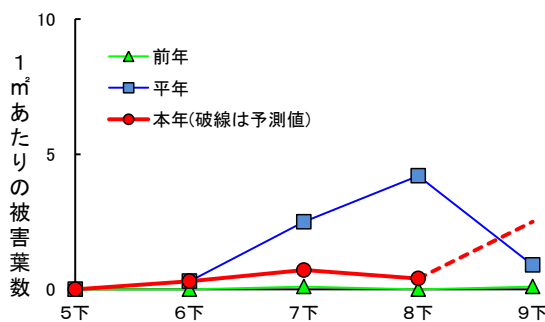


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の推移

②フェロモントラップ

平年比：並（±） 前年比：並（±）

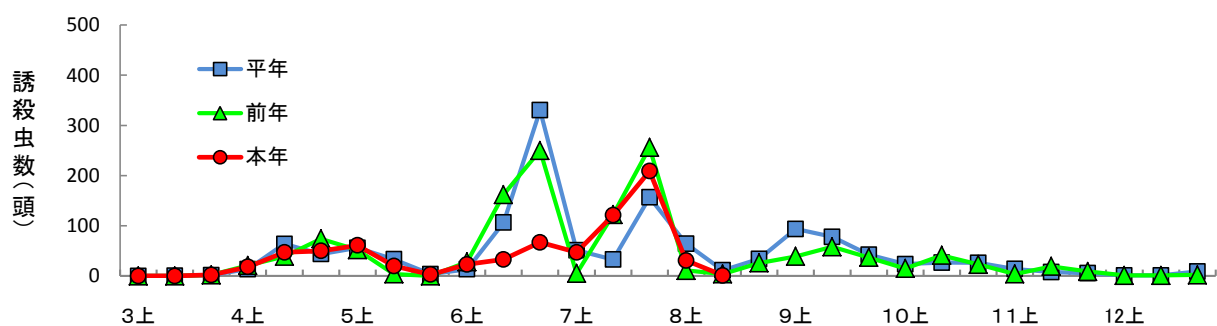


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 9月の気象予報

平年に比べ、気温が高く降水量は並と予想され、多発生の条件（+）

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp